

令和 5 年度

事業所名 : グループホーム 金山 (南棟)

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0391000023		
法人名	医療法人 勝久会		
事業所名	グループホーム 金山 (南棟)		
所在地	岩手県陸前高田市竹駒町字相川73-30		
自己評価作成日	令和5年8月20日	評価結果市町村受理日	令和5年12月18日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和5年10月23日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

グループホーム金山は、元はグループホームつばきとグループホームりんごが竹駒町で休止中だった施設(グループホーム金山・グループホーム竹の里)に、平成30年9月1日に引っ越し、2ユニットとして再開した施設である。介護老人保健施設松原苑、松原クリニック等とは距離的には離れてしまったが、法人としても入居者の状態変化、急変、災害時には各事業所への応援要請、連携を行い速やかに対応できる体制は継続されている。医療面では松原クリニックや訪問看護と連携し、看取りが可能な体制となっている。また、コロナウイルス感染のバックアップ体制も出来ている。実際、昨年11月に北棟でコロナウイルス感染が広がリクラスターとなったが、感染対策の体制や職員の補充など様々な援助を受けた。老健と同様に職員は委員会活動しており、可能な限りいろいろな情報が入手でき、勉強会にも参加している。陸前高田の在宅医療を支える会等、外部の研修機会もコロナウイルス流行前は参加していた。月1回以上は季節に合ったイベント行事を開催している。閉じこもり予防や季節を感じられるように、頻りにドライブ等の外出(感染予防の為に外部との接触は避けて)をしている。庭には家庭菜園があり、そこで採れた新鮮な野菜を提供している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は市内西地区の丘陵地帯に位置し、周辺には郵便局やコンビニがあり、敷地内には小規模多機能ホームもある。入居者の「その人らしさ」に焦点を当てた理念と運営目標を示し、家庭に近い雰囲気できつろげる環境を提供している。入居者は、買い物の品物を選んだり、ドライブの行き先などの意見や要望を出し、職員は入居者の思いを受け入れ運営に反映させている。家族とのコミュニケーションも大切にし、面会時には日々の状況を説明し、居室担当が書面で状況を伝えている。コロナ禍が落ち着くにつれ面会制限を緩和し、感染対策を講じながら遠方からの面会も受け入れられている。利用者人間関係が途切れないように葉書を送ったり、希望があれば自宅への訪問や携帯電話での連絡をサポートしている。コロナ禍の影響下でも、感染予防と入居者の健康状態を考慮しながら外出活動を実施し、ドライブや日光浴、買い物などの活動を提供している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

令和 5 年度

事業所名 : グループホーム 金山 (南棟)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念をホーム内に掲示し目につくようにすることで、常に見るためにスタッフがどのように考え、行動すべきかを目的に示し実践している。グループホームの特性を活かし「施設」というよりは自宅の延長、家庭に近い雰囲気ですっきり過ごせるように心がけている。	スタッフは「その人らしさ」に焦点を当てた理念と、その実践に向けた運営目標に基づいてサービスを提供している。グループホームを施設ではなく、自宅の延長と捉え、家庭的な雰囲気を提供するよう心がけている。管理者は、ミーティング時などを活用しながら理念と運営目標の共有を図っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナの影響もあり、例年行われている敬老会や夏祭り行事等、事業者内での小規模開催となっており地域の方々との関わりは制限せざるえない状況。その中でも地域に根付けよう利用者が回覧板を近所に届けたり、近隣小学校の運動会等の地域行事が開催されれば感染対応しながら見学に行ったりと、出来る範囲で交流に努めている。	感染症対策のため、地域の方々との関わりを制限しているが、入居者は回覧板を近所に届けたり、運動会の見学や雑巾の提供などの交流は続けている。事業所は地域に対して何でも相談所の役割を果たし、管理者は陸前高田の在宅医療を支える会(チームけせんの和)に参加し、劇を通じてた啓蒙活動を行っている。	コロナ禍により、地域との交流が減少しているが、感染症の状況を見ながら、再び地域との交流を再開していくことを期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議の近況報告書でホームでの取り組みや認知症の方の日常生活、認知症ケア等について報告している。また、グループホーム金山・小規模多機能ホーム玉山共に地域の何でも相談所という役割を持っていると地域に発信しており、相談も受けている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回開催予定していたが、コロナウイルス感染症予防の観点から、現状は書類を通しての報告としている。運営推進委員とは文書での意見集約を行い、活用している。地域の感染状況により、以前のような通常開催を検討していく。	コロナ禍での感染予防のため、対面会議を避け、書面開催としている。行政には資料を提出し、意見を収集し、他の委員には自宅に資料をお届けして意見を伺っている。委員からのコロナ関連の対策や災害避難に関する意見を受け、それを運営に反映させている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	2ヶ月に1回の運営推進会議の近況報告書を市の担当者に提出している。極力、市のケアマネ会議や研修に参加し、情報交換を行っている。陸前高田の在宅療養を支える会のイベントにも参加し、地域への医療・保健・福祉の啓蒙にも協力予定である。	行政情報は文書やメールで受け取り、運営推進会議での近況報告書を提出している。定例的に開催されるケアマネの地域ケア会議や、メールを活用し情報交換している。陸前高田市が事務局を担う在宅医療保健福祉支える会の活動に参加し、連携を図っている。	

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束は行っていない。又、玄関の施錠もせず不穏な利用者が外出しようとした場合や玄関先のベンチに座っている時でも、否定せず傾聴や見守り、行動を共にすることでその人を尊重している。夜間帯にはリスクの軽減を把握するためにセンサーを設置しているが、あくまで安全性を保つためであり、行動制限はせず動きの確認のために使用している。同敷地内の施設間で離棟リスクのある利用者は写真等で情報共有している。	法人の委員会が主導し、組織的に会議や研修を行い、職員間で情報共有と伝達講習を行っている。処遇困難者への対応は、職員間でアセスメント情報を共有し、家族とも密接に話しあい、屋外徘徊時のリスクも伝えている。施設は夜間に施錠するが、居室の窓は自由に開閉できる状態である。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	法人の高田施設でも定期的に研修を行っている。また、法人としてeラーニングシステムを取り入れており、各職員で個別にも学習できる体制である。身体的、精神的、金銭的(家族に関わる)虐待にも注意している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人の高田施設でも定期的に研修を行っている。また、法人としてeラーニングシステムを取り入れており、各職員で個別にも学習できる体制である。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約前に感染予防に配慮しながら(コロナ流行地からの家族は直前に検査を受けてもらう)、なるべくホーム内の生活の様子を事前に見学してもらう。申し込み相談や見学希望も増えている。契約時には十分な説明を行い、合わせてリスク説明も行っている。入居者、家族が納得した後で契約をしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日常的に入居者の話を傾聴し、希望や不満がないかを理解する様に努めている。家族が面会時には日々の様子を説明したり、毎月請求書と共にお便りとして書面で様子を伝えている。また、高田施設としても定期的に家族全員を対象としたアンケートを行う、ホーム玄関に意見箱を置く等、要望を聞き入れる体制を構築している。	入居者は、コーヒータイムなどに新聞のチラシを見ながら買い物した物やドライブの行き先を選んでおり、その具体化に努めている。家族とは定期的に面会し、書面を通じて情報を共有し、年1回の家族アンケートも実施している。改善提案があれば、それを運営に取り入れている。	

令和 5 年度

事業所名 : グループホーム 金山 (南棟)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のスタッフミーティングや連絡ノートを活用し、随時、意見や提案が出来る体制を作っている。本部から運営に関する話があったらその都度、伝えている。日常業務の中からも職員の意見を汲み取れる様な環境作りに努めている。	職員との年2回の面談や職員会議、連絡ノートを活用し、職員が意見や提案をできる体制が整っている。管理者は、利用者の変化に合わせて柔軟な支援を提供するため、職員と連携して情報を共有し、支援方法を調整している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	随時、事務長・看護顧問に相談しており、職場環境を理解してもらっている。隣接している小規模多機能ホーム玉山の所長は小規模施設を統括している立場であり、要望を伝えやすい環境下である。年2回人事考課を行い、個々の評価・意見集約を行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	現在はコロナウイルス感染予防に留意しながら徐々に法人外の研修参加を増やしている。今年度は職員1人を認知症実務者研修に参加させている。法人としてe-ラーニングシステムを取り入れており、各職員で個別にも学習できる体制である。法人内研修は定期的開催されており、参加できるようにしている。月1回のスタッフミーティングの際に事業所内の勉強会も行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナウィルスの影響で機会は減ったが、流行前は県、ブロック定例会や各研修等に参加していた。その際に他ホームの職員との意見交換等を通し、情報収集の場を設けサービスの向上につなげている。現在は陸前高田の在宅療養を支える会や認知症の人と家族の会等の研修に参加し、交流を図っている。		

II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援

15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	他施設利用経験や担当居宅ケアマネがいれば事前に情報を収集しておく。その後、入居前の訪問、ホームの見学、サービス利用中の状況確認等を行い、不安に思っている事や要望等を傾聴し、安心して利用できるように対応している。		
----	--	--	---	--	--

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	自宅での介護経験を聞き入れ、家族の不安・要望に傾聴し対応している。アセスメントを通じ、具体的なケア内容を提案する事もある。サービス開始後も毎月連絡表を送っている。面会の機会があれば本人の状況を報告、要望を傾聴し対応している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	状況に応じて適切なサービスを検討し、本人・家族に説明し、承諾を得た段階で他施設の相談員と連携を取っている。その時々々の状態に合わせたサービスを提案し、本人・家族に選択してもらっている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	アセスメントをから、今までの生活歴、趣味を活かせるように場面に応じ、食事・おやつ作り、裁縫や畑作業等を積極的に行っている。入居者と職員間で教え合い、意向を尊重した姿勢で関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人が過ごしやすい生活を送れるように協力を働きかけている。毎月、ホームでの生活の様子、健康状態、お小遣いの残高をお便りで報告している。体調の変化についても随時、報告と相談をしている。家族に、こちらから生活における相談や受診等の援助を求めた際、スピーディーに対応してくれている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会制限を緩和し、徐々に面会の機会が増えている。遠方からの面会者も拒否することなく感染対策しながら対応している。利用者自身が大切にしていた人間関係が途切れないよう時節ごとにはがきを出すなど支援に努めている。利用者から希望があれば職員が自宅に連れて行ったり、姉妹や知人と携帯電話を活用して連絡を取り合っている入居者もいる。	入居前には、事前に地域における人間関係などの情報は事業所専用のアセスメント表を使用して把握し、入居後も継続して本人や家族等から情報を得るようにしている。面会制限が緩和され、感染対策を実施しながら遠方からの面会を受け入れ、また、入居者の貴重な人間関係が途切れないように時節毎にはがきを出している。入居者の1人は携帯電話で自由に知り合いと通話している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日常生活の中から、利用者同士の関係性を把握し、様々な作業やレクリエーション行っている。職員が間を取り持ち、話題を提供している。北南棟の行き来もある等、ホーム内の環境にも配慮している。		

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他の施設に入所・入院した利用者・家族の情報収集は行っており、その後の相談される事がある。亡くなった場合には管理者が家族の状況を収集し、必要に応じてメンタルケアや葬儀参列等のフォローをしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	アセスメント情報に基づいた希望、意向を考慮している。毎日本人に何をやりたいか確認し選択してもらうことでスタッフの押し付けにならないよう対応している。困難な場合には生活歴や現状を把握した上で表情や態度などの反応を大切に無理なく援助している。	入居者の希望や意向は、暮らしの中で職員が把握に努めており、介護計画作成時には計画作成担当者も同様に情報を収集している。ほとんどの入居者は、元気で楽しい生活を望んでいる。把握が困難な場合には、その生活歴や現状を理解したうえで、表情や態度などの反応を尊重しつつ、適切なサポートを提供している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	日常生活の中から、利用者同士の関係性を把握し、様々な作業やレクリエーション行って頂いている。若い頃に同じ職場、出身地域だった等の関係性を活かし、話題を提供している。北南棟の行き来もある等、ホーム内の環境にも配慮している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者一人ひとりの1日の過ごし方を見守ったり見極めたりすることで、心身の状態変化にすぐ対応できるように努めている。職員間の申し送りの体制も出来ており、隙間なくケアを努めている。状況によっては医療側(主治医や訪問看護)に相談している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	個別では定期的にケアプランを評価し内容を共有している。1ヶ月に1度利用者の状態を家族にお便りで報告している。電話や来苑時に直接家族の希望を聞き、ケアプランに反映させている。又、スタッフミーティングでは計画通りに行っているか、状態に変化はないか意見を述べ合い再確認している。変化があったりアイデアがあった際は随時計画の見直しをするように取り組んでいる。必要に応じて多職種との連携も行っている。	計画作成担当者は、居室担当者と共にアセスメントと計画作成を行っている。計画には、入居者の希望である「定期的な外出」「畑仕事」「調理をしたい」などが反映され、家族の意向は、電話や訪問時の直接聞き取ったものを計画に組み込んでいる。職員会議ではモニタリングを行い、入居者の状況に応じて計画を修正している。	

令和 5 年度

事業所名 : グループホーム 金山 (南棟)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の利用者の様子をケース記録として残している。日々の様子の要点をまとめた申し送り表も活用している。利用者が発言した言葉や表情、行動から気づきや工夫をくみ取り介護計画の見直しに活かしている。健康管理や医療側(訪問看護)との関わりは健康管理記録票を活用している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時に生まれるニーズに関しては必要に応じ家族に報告、相談する。状況に応じた支援を提供できるようにフォーマル・インフォーマルサービスを調整している。特に医療面でのケア(主治医や訪問看護との連携)については、柔軟に対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナウイルス流行前より地域との関りは減っているが、その代わり、施設内での役割を重視している。近所に散歩や回覧板配り、近くの商店での買い物等を行っている。知人と電話での関りや、希望があればリモート面会の設備もある。閉じこもり予防や震災復興の様子を感じてもらうために、ドライブを積極的に行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医をそのまま継続し受診して頂いている。希望があれば、松原クリニックに、切れ目がない様に変更している。家族が看取りを希望された時にも松原クリニックの協力に対応する体制は出来ている。家族が付き添う際には、本人の状態の報告や連絡が必要な際は書面にて伝達し関係を保っている。	半数が協力事業所のクリニックが主治医であり、感染リスク軽減のため医師がグループホームに出向き対応するなどの連携が図られている。通院は原則家族対応としているが、対応が難しい場合には職員が付き添っている。歯科受診について、協力歯科クリニックが協力医療機関に出張診療に訪れる際に、併せて入居者も受診したりしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回訪問看護による健康チェックが行われており、状態の報告・相談を管理記録に記載して伝達している。それによって職員全員が共有できている。また、随時、体調の変化には関しては訪問看護に相談し、来苑して見てもらっている。		

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院設備のある県立高田病院と県立大船渡病院では医療連携パスという様式を使用している。入院時には1週間以内に記入し病院に提出し、退院時に病院側よりもらう流れとなっている。面会制限を考慮しながら情報収集を行い、その際は医師や看護師、相談員と情報共有出来る体制としている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居者の状態に変化が見られた際は、家族に今後の方針について説明を行う事としている。看取りのマニュアルもあり、希望によっては松原苑や松原クリニックと連携していく体制となっている。事業所内においては、看取りに関する研修に参加したり、各部署との連携をとれる体制をとっている。	利用者や家族には終末期までの対応が可能な旨を説明し、状況により家族も付き添えるよう部屋の確保もある。職員はeラーニングを活用し終末期の対応を学んでいる。法人が運営する医療機関、訪問看護ステーションがあり、連携は図られている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	職員はAED、心肺蘇生法の講習を受け、応急手当や初期対応の仕方を訓練している。AEDは同一敷地内にある小規模多機能ホーム玉山に設置してある。緊急時の対応マニュアル等を活用して職員間で再確認を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に避難訓練を行い避難できる方法を身につけている。時には抜き打ちで訓練を行うことでスタッフへの心構えを再確認している。避難する際の必要物品や食料も備蓄しており、避難場所も確立されている。法人としてもモバイル通信が発信され応援できる体制もできている。ホーム内には回転灯があり地域に知らせる対策もとっている。行政から「避難指示」が発令された際には旧GHつばき・りんごに避難する事としている。	年2回、近接の小規模多機能ホームと火災訓練を実施している。コロナ禍のため、消防署や地域住民の参加までは求めていない。ハザードマップ上、グループホームの一部が土砂災害警戒区域に当たるため、高齢者避難準備の指示が出た場合には、早めの避難としている。備蓄物品は法人対応として確保されている。法人全体では、モバイル通信を活用し近隣の法人職員が必要に応じて支援できる体制を整備している。	

IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援

36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の情報を共有した上で会話や容姿などプライバシーに気を付け対応している。声掛けの際は近くに歩み寄り視線を合わせたり、敬語の中に方言を交えることで安心感を与えるような支援をしている。入浴や排せつなど身体ケアでは他の利用者の目に触れないように支援したり、同性職員が対応したりしている。	入居前の生活歴を把握し、個人を尊重し自尊心を傷つけないよう、職員は日頃から声かけには言葉や語調に配慮し過去を呼び覚ますように敬語、方言を入れ対応している。また、職員同士の不適切な言葉など、ミーティングを活用し所長が中心となって直していく方針で対応している。	
----	------	--	--	--	--

令和 5 年度

事業所名 : グループホーム 金山 (南棟)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の生活の中でも利用者の思いや希望を傾聴し、気付けるよう努めている。変化があれば、職員間での情報共有を図り対応している。自己決定が出来る様に支援しつつ、難しい場合は選択肢の中から選んでもら得る様な対応を心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務優先ではなく、入居者優先と考え一人ひとりのペースを大切に、入居者の訴えを傾聴し、可能な限り希望に沿った支援をしている。例えば午前中のお茶時間に「今日は何がしたいか?」と聞いたり、朝が苦手な朝食が遅くなりがちな人でも、急かさずにその人のペースに合わせている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	個々に合わせたおしゃれ、身だしなみにお化粧品道具を準備したりしている。衣類も一緒に選んだりして、本人の着たいものや季節感に合ったものを着て頂いている。行事の際には皆で浴衣等を着て楽しんでもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	本人のできる作業を把握し、野菜の切り方、片付け等に参加してもらい、定期的な得意なお菓子作りをして頂いている。会話の中から好みの食べ物を聞き出しメニューに入れる。チラシを見てもらい、希望を聞いてその日に購入・提供する事もある。誕生日には本人の好きなメニューを提供している。季節ものやお楽しみメニューも取り入れている。	コロナ禍のため毎日の食材購入も職員が買い出しをしている。調理担当の職員と一緒に野菜の切り方に加わったり、うどん、雁月、柚餅子、団子作りの得意な入居者に腕をふるってもらうことも度々である。法人の管理栄養士に栄養価や食事バランス等のアドバイスを貰える機会もある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの状態に応じ、食事量、水分量を把握し、メニューに栄養の偏りのないようバランスのとれた食事を提供出来る様に努めている。同法人内の老健の管理栄養士に献立を出し、栄養のバランスを確認して頂いている。グループホームのユニット同士で献立の情報交換することもある。また毎月測定した体重を報告している。		

令和 5 年度

事業所名 : グループホーム 金山 (南棟)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	本人の有する能力を生かしながら、毎食後、口腔ケアを行っている。夕食後には義歯洗浄を行っている。老健の歯科衛生士に随時相談をしたり、2週一回松原苑に協力歯科医が来るので、必要に応じ相談・治療をしてもらう体制となっている。通院援助も行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を使用し排泄パターンを確認している。排泄で失敗する利用者もいるが自尊心、羞恥心を考慮するように心がけている。尿意便意が曖昧な方にはなるべく便座に座ってトイレで排泄するという意識を持ってもらう様に支援している。オムツとの使用は極力避け、その都度、身体面・認知面を考慮し、利用者にあった排泄ケアを相談しながらケアしている。	入居者の排泄が改善したというより現状維持の状態としてしている。自立の方は8人、リハビリパンツや尿取りパットの利用がほとんどで、半数は声かけがなくとも自分でトイレに向かっており、本人の残機能を尊重した見守りを主としている。結果的に排泄パターンの安定と失禁の減少、トイレの使用を実現している。夜間にポータブルトイレ使用者は1人で、センサーマット設置者もいるが、あくまで安全確認に留めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日の牛乳の提供、食物繊維の多い食材を取り入れた献立の工夫をし、体操や散歩等、体を動かす時間を設けている。便秘症気味の方には、日頃からの運動やマッサージや市販の飲料品(センナ茶)で対応している。医師の指示で下剤をしている利用者もいる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週2回を基本(皮膚疾患によって回数調整する)に入浴してもらっている。体調や気持ちを考慮しながら対応している。男性職員の介助に嫌悪感を持つ利用者には女性職員で対応している。リラックスと乾燥肌予防の為に浴用化粧料を使用し、介助と同時に皮膚状態の観察も行っている。家庭浴槽での入浴が困難な場合は特殊浴槽を準備している。	週に2回の入浴を基本とし、日曜日を除く毎日3、4人が入浴している。入浴を希望しない場合には、時間調整を行い再度勧めるなど柔軟に対応している。基本的に一人でゆっくり入浴しながら、職員との会話が弾みリラックスしてもらっている。介助は、同性介助とし皮膚観察しながら見守り程度としている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	畳やソファ等、いつでも自由にくつろげるスペースを設けている。個々の体力を考慮し日中昼寝を促している。気温については各部屋にエアコンを設置しており、その人の体質(寒がり・暑がり)に合わせている。掛け物調整や湯たんぽ、電気毛布等の活用もしている。香りの配慮し、芳香剤や天然のラベンダーを置いている利用者もいる。		

令和 5 年度

事業所名 : グループホーム 金山 (南棟)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	受診後の処方薬の確認、申し送りにて職員間で共有し、把握に努めている。特に、新たな処方があった場合は注意している。また、情報をまとめたファイルを活用いつでも閲覧出来る様になっている。内服薬が多い利用者は薬局にて一包化の協力を得ている。訪問看護とも健康管理記録表を活用し共有している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴の中から出来ることや得意なことを把握し、それを基に日常生活の中で役割(おやつ作りを含む家事全般、畑仕事、生け花等)を支援している。家族への贈り物や展示物を作る等の目標を立てて活動することもある。その日に何をやりたいかを聞きながら、日常のマナー化をしないことを目指している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナウィルスの流行前は頻回に外出していた。現在は感染予防の為に、客が少ない時間帯に買い物を行ったり、貸し切りに出来る環境(食堂等)で計画しながら、徐々に外出のイベントを行っている。「ちょっと家さ連れてけや。」と希望があれば職員が自宅に連れて行ったり、季節を感じて頂くための外出や日常的なドライブも積極的に行っている。新聞やテレビを見て急遽ドライブに行くことも多い。外泊は感染予防の為に行っていないが、面会は徐々に制限を緩和し感染予防しながら行っている。	コロナ禍の中でも、感染予防と健康状態を考慮しながら、ドライブや日光浴、買い物などに外出している。ドライブは30分~1時間程度の行程で、10人乗りのボックスカーや小型乗用車などで牧場、道の駅等、ニュースや新聞で季節情報を得て出かけることもあり、入居者から好評である。また、兄弟の家を訪れたり、お悔みに連れて行くなど、入居者の外出希望に柔軟に対応している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居者の能力に応じ、管理方法を変えている。施設管理の小遣いの他に少額を自己管理してもらっている利用者もいる。コロナウィルス感染予防しながら、入居者・職員と一緒に買い物に行ったり、欲しい物を傾聴して、職員が購入することもある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援している	本人と家族の絆を大切にしながら、情報を得ることにより、本人が過ごしやすい生活を送れるよう働きかけている。本人から要求あった際は電話を取り次ぎ、いつでもお話できるように支援している。こちらから暑中見舞いや年賀状を出したり、家族から手紙を頂く事もある。携帯電話を活用する利用者もいる。		

令和 5 年度

事業所名 : グループホーム 金山 (南棟)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節に合わせた作品を利用者に作ってもらい展示している。七夕やお雛様、正月飾りなど時節ごとに飾っている。毎月、撮影した写真を廊下に展示し眺めてもらっている。懐かしいと感じられる様な歌を流し、合唱していることもある。ホールはコロナウィルス感染予防の為に換気を取り入れながら室温調整している。トイレには清潔感や安心感を引き出す芳香剤を使用し、居心地の良い場所と認識してもらえる様に配慮している。	クリーム色の壁、茶色の腰板、ソファー、食事用テーブル、食事後にソファーに移り大型テレビでくつろいでいる。入居者と職員で作ったハロウィーンの飾り、日めくりカレンダー、写真が掲示されている。廊下には天窓があり、サンルームからの日差しが差し込み明るい。玄関には、家族からの花が生けられ、季節感を出している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	サンルームや廊下にイスを置いたり庭にベンチを置き、思い思いに過ごせるような居場所を確保している。また、就寝時間は特に決めておらず、ゆっくりテレビや新聞を見て過ごす利用者もいる。その際には希望によりおかしや飲み物を提供している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所時に家で使用されていた馴染みの家具を持って来てもらい、自宅にいた時の部屋に近づけることで、安心して生活できる環境にしている。家族写真や作品、賞状等を居室に飾っている。位牌や仏壇を持って来て、毎日、お茶を供えている利用者もいる。	居室には、ベッド、カーテン、エアコン、洗面台が設置されている。入居者は、自宅から馴染みの家具を持ち込み、ほとんどの入居者が自室を掃除している。入居者の1人は毎日仏壇に仏飯を上げて家族への思いを大切にしている。衣類は季節ごとに交換するよう家族に協力をお願いしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設内は段差のない環境となっている。各居室、トイレ等のプレートを目線に整備し、安全に配慮しながら出来る事を考慮している。不備があればすぐ点検、整備を行っている。ADLにより福祉用具も随時、準備出来る体制としている。		